

7. HBs 抗原・RIA キット (トラペノール) の基礎的検討

金森 勇雄	服部由美子	松尾 定雄
矢橋 俊丈	吉田 宏	樋口ちづ子
(大垣市民病院・放)		
中野 哲	綿引 元	武田 功
小沢 洋	杉山 恵一	(同・消)
佐々木常雄	石口 恒男	(名大・放)

今回われわれは、近年トラペノール社より開発された HBs 抗原 RIA キット (試験管固相法) の基礎的検討を行い次のごとく結論を得た。

1) Incubation 条件

1st. incubation は室温で 20 時間, 2nd. incubation は 37°C, 3 時間が最も良好なる incubation 条件であった。

2) 洗浄回数

最低 2 回は必要である。

3) 再現性

同時再現性の C.V. は 2.7~33.3%, 日差再現性の C.V. は 14.8~25.0% の間にあり, 低い ratio より高 ratio に移行するに従い再現性は良好となる傾向が認められた。

4) 希釈曲線

本法は従来法に比し, 全体的に高い cut off ratio を示す, 非常に良く類似した曲線であった。

以上のごとく, 本法は従来法に良く類似したキットであることより, 従来法とともに日常の検査に問題なく使用し得るものとする。

8. HBc 抗体測定の意義 (第 2 報)

矢橋 俊丈	松尾 定雄	吉田 宏
樋口ちづ子	金森 勇雄	(大垣市民病院・放)
中野 哲	綿引 元	武田 功
小沢 洋	杉山 恵一	(同・消)
佐々木常雄	石口 恒男	(名大・放)

今回, われわれは 522 例の各種肝疾患において HBc 抗体の測定を行い, ウィルス肝炎診断における HBc 抗体の意義を検討し報告する。

(1) 急性肝炎および劇症肝炎では Total-HBc 抗体測定に IgM-HBc 測定を併用したことより以前に比し持続感染との鑑別が明確になり, HBs 抗原が消失した時期

でも IgM-HBc 抗体が検出されることより HBs 陰性 B 型肝炎と診断される症例が少なくなかった (急性肝炎 14.3%, 劇症肝炎 25.0%)。

(2) 慢性肝疾患では HBs 抗原陰性例で病像が進行するにつれて HBc 抗体価が増加する傾向がみられ, B 型肝炎ウィルスの関与が示唆された。陽性例でも, わずかながら同様の傾向がみられた。特に ASC の 30 歳代までの HBe 抗原フェイズに低抗体価が集中する傾向がみられた。

以上の結果と現在までの HBV マーカーの検討より, HBc 抗体測定の意義を認識することは臨床面および今後の検討課題に役立つものと考えられる。

9. RIA における標識放射能の管壁附着

吉積 智子	田中 浩美	大西 勝治
榊原 弘之	月田 邦彦	河村 信夫
仙田 宏平	(名古屋第一赤十字病院・放核)	

最近開発されたビーズ固相法による CEA 測定用キットを試用して, 標識物質が, 反応系内で Free と Bound に分離される以外に比較的多く Assay 用チューブの管壁に附着し残留することが判明した。そこで, この残留放射活性が RIA 測定での定量値にどのように影響するのか検討した。その結果, ビーズ固相法を利用した RIA (CEA, AFP, T₃U) における標識物質のチューブ管壁への附着は, polystylen 製, polypropylen 製チューブの材質による差はなかった。検討種目のうち CEA での附着が最も高い計数率を示した。附着量は血中フリー濃度に関係なく, トータルカウントの 0.5% 前後を示した。CEA 測定値の正常域濃度における CV 値は, ビーズ直接測定で 9% 前後に対し, ルーチン測定では 14%~30% と大きな変動を示した。以上の検討結果から, ビーズ固相法による RIA の内, CEA のように低濃度域で有意性を判定する検査は精度管理上, ビーズを直接測定することが望ましいと考える。標識物質の管壁附着の機序に関してはさらに検討する必要がある。